現代の貧困を訪ねて

第157回 永田豊隆（とよたか）の『妻はサバイバー』

生田（いくた） 武志（たけし）（野宿者ネットワーク）

著者は朝日新聞の記者で、貧困問題の取材で何度かぼくもお会いしている。今回、この本を贈っていただいて読みはじめたが、数ページ読んでは苦しくなって、しばらく時間をおいてまた読みはじめるということを繰り返した。トラウマ、依存問題の生々しさと、一緒に生活する家族の困難に、いろいろな思いで胸がいっぱいになって、とてもあっさりと読み進めることができなかった。

結婚当初、平穏に暮らしていた夫妻の生活は、三年目から妻の過食嘔吐で変わりはじめた。妻は一日六～一〇時間も食べ吐きし、「二五キロ以上はデブだ。やせなきゃ」と体重が激減し、低カリウム血症になる。過食による食費のため、やがて貯金が尽き、金融機関から借り入れせざるをえなくなった。アルコール依存がはじまり、連続飲酒の状態になり、その影響で妻は低栄養と肝機能障害、大腿骨壊死（えし）やアルコール性認知症を発症するようになる。

この間、自傷行為や離脱症状のため、精神科病院への入院は三〇回を超えたが、主に家族の同意による「医療保護入院」だった。著者自身も妻のサポートと仕事の両立の困難から不眠、抑うつ、食欲不振になり、抗不安薬を服用しながら三か月の休職にいたる。この前後、釜ヶ崎などで永田さんと顔を合わせたとき、事情はまったく知らなかったが、顔色があまりに悪いので「鬱なのでは」と思ったことを思い出した。

夫妻はカウンセリング、自助グループ、精神科医療に通い、治療の道を求め続ける。しかし、すぐに好転する方法は見つからない。カウンセリングで明らかになってきたのは、妻が経験してきた子ども時代からの虐待、そして性暴力だった。長期にわたって繰り返された虐待による複雑性ＰＴＳＤには「感情をコントロールできなくなる」「自己破壊的な行動を取る」という症状がある。妻が書き上げた自分史を読んだ著者は「よく生きてきてくれた」と思う。

二〇年以上の壮絶な記録からあらためて感じるのは、虐待や性被害がどれほど人に長期間にわたって回復困難な傷を負わせてしまうかということだ。傷は耐えがたい「息（生き）苦しさ」「心の激痛」になっていく。生き延びようとする人は、それを紛らわせるため、自傷行為で「体の痛み」に置き換えようとする。「妻は二〇年間、『緩慢な自殺』を試みていたのだろうか。否、必死で生きようとしてきたのだ」。しかし、その「自己治療」はアルコールや薬物依存、そして本当の自殺につながる可能性すらある危うい「一時しのぎ」でもあるのだ。

著者が必死に妻をサポートしつづけるあり方は感動的だ。だが、同時に家族だけがサバイバーを支えることの困難も示している。著者は、家族会、自身のカウンセリングに通い、介護休業制度を使って自分を客観視していこうとする。障害者手帳などの制度を使って訪問看護や訪問介護も家に入るようになり、妻との関わりは社会に開かれていく。

本のなかで著者は何度か貧困問題の取材経験を振り返っている。精神障害や貧困に苦しむ人の背後には、社会の構造的問題がある。さまざまな事件を個人の問題にせず、その「背景にある貧困や差別、社会保障の不備にこそ取材力を注ぐべきだ」。夫妻の経験が浮き彫りにするように、トラウマ治療を敬遠する医療機関、不十分な福祉制度、精神疾患に偏見をもつ社会を変えなければ、当事者も家族も「サバイブ」することはできないのだ。

ぼくは、いろいろな相談の場で、食べ吐き、リストカット、アルコール依存、オーバードーズ、水中毒の当事者や家族からの相談を受けることもあって、この本から問題の根深さと解決の困難さをあらためて感じた。それと同時に、必死に生きつづけようとした妻と夫、そして二人を支えた自助グループ、カウンセラー、医師など多くの支援者のあり方や言葉から、大きな希望と具体的なヒントをもらったとも感じている。